

研究区分	教員特別研究推進 国際共同研究・国際交流の促進
------	-------------------------

研究テーマ	モンゴル国女性の子宮脱を改善するために必要な人材としてのドゥーラの役割に関する調査				
研究組織	代表者	所属・職名	看護学部・教授	氏名	荒井 孝子
	研究分担者	所属・職名	看護学部・教授	氏名	竹熊 カツマタ 麻子
		所属・職名	看護学部・准教授	氏名	堀 芽久美
		所属・職名	看護学部・講師	氏名	福島 恭子
		所属・職名	筑波大学医学医療系国際看護学 ・助教	氏名	Ganchimeg Togoobaatar
		所属・職名	国立モンゴル医科大学看護学部 ・教授	氏名	TSETSEGMAA Parchaa
	発表者	所属・職名	看護学部・教授	氏名	荒井 孝子

講演題目	モンゴル国におけるドゥーラの役割および活動の実際について
研究の目的、成果及び今後の展望	<p>本研究では、モンゴル国のドゥーラの教育および活動の実際について調査を行うことを目的とした。モンゴルではドゥーラの教育に積極的であり、筑波大学の福澤利江子氏がこれまで積み重ねてきたドゥーラ教育の基礎があり、今回は母子保健センターでの継続研修に参加させていただいた。同センターはJICAのプロジェクトにおいて市内4施設の病院助産師がドゥーラについて学んだあとに研修を受け入れるなどして少しずつ発展させてきている。モンゴル国立医科大学の助産学課程の教授、准教授の講義に続き、福澤氏からのドゥーラのエモーショナルサポートについて概説された。ドゥーラの要素として大切なことは“人と人とのつながりである”ということが前提となっている。そして、その真ん中にはエモーショナルサポートがあることが大切である。昔は自然に助け合っていたことが、病院でのお産や核家族化により社会が必要とするようになってきた。出産した母親たちは前のお産で傷ついた経験や不安な思いがある。そしてその経験はいつまでも忘れることがないものである。エモーショナルサポートがうまくいくと、母親は自分らしくいられ、セルフコントロールができるためお産への満足度が得られる。身体と心は相互作用であり、身体がつらいと心もつらくなる。しかしお産はわからないので、流れに任せることや予測できないことも受け入れなければならないこともある。だから女性が強くあるためにはサポートが必要である。お産は思うようにいかない、それでも女性は自分らしいお産がしたい。母親は助産師が忙しいことも知っている。ちょっと聞きたい、さすってほしい、寂しくても遠慮してしまう。だからドゥーラをつけるのである。そうすると安心でき、母親は穏やかな雰囲気が保てる。そうして信頼関係をつくり、ドゥーラが産婦と医療者の架け橋になることで、産婦と医療者の信頼関係もできてくる。いろんな助産師がいていい、いろんなドゥーラがいていいと結ばれた。同施設の産科病棟を見学させていただいたが、1日12人から40人が出産し、12000人/年の出産があるが年々減っている。昨年は10000～11000程度であった。近年は巨大児の出産が多く、肩の娩出が難しいとのことであるが、会陰切開は50%以下であった。この病院ではドゥーラがすべての母親について助けるが、夫の助けがよいか、ドゥーラの助けがよいかは産婦が決めることができる。助産師はドゥーラに教え、看護スタッフは夫に母親の助け方を教える、つまり夫がドゥーラになる。だれもいなかったら助産師たちが助ける。したがって、妊娠期から家族を含めて教育を受けて出産に臨むとのことであった。日本のお産の環境とは異なる役割を担っていることが示された。</p>